

本能寺蔵『落葉百韻』調査記録

【調査日時】 平成二十二年五月三十一日(月) 午前十時～午後三時

【調査場所】 本能寺宝物館「大寶殿」三階第二会議室

【調査者】 中尾堯・伊藤伸江・奥田勲(その他見学者ハルオ・シラネ)

【調査書誌】

本調査の対象である『落葉百韻』は、古写、卷子本一軸。軸は朱頂黒漆の合わせ軸、軸長二〇・一センチ。八双は竹、紐は根元から取れて存しない。

表紙は、幅二十一・五cm、天地十八・一cm。いたみが激しく、一部裂け、切れかかっている。題簽はなく、金銀貼りちらしの装丁をほどこされていたが、銀は焼け、剥落している。表紙左中央下に「大本山本能寺什寶」(昭和十五年八月三十日付)のラベル、中央下に「本能寺文書 寅 11」と書かれた新ラベルが貼られている。この新ラベルの貼付年月日は不明であるが、『本能寺史料』(平成四年)の編纂発行のためになされた、藤井学・波多野郁夫両氏を代表とする調査団による調査の際に貼られたものであり、現在はこのラベルの表示番号により整理され管理をされている由である。

表紙左上「一条太閤代」の字が見えるが、それ以外は文字は読み取れない。

見返しも、表紙同様いたみ、金銀貼りちらしの装丁をほどこされていたが、銀は焼け、剥落している。右上に二行文字が見えるが、読解しえない。

中央下部に、はつきりと花押が残る。柔らかい筆であり、公家、法華僧など有力者の花押かと思われるが、不明。袖判であろう。

本紙は、連歌の百韻が書かれた楮紙に裏打ちをほどこした計八紙を貼り、卷子に仕立てている。以下寸法を記す(のりしろは除外する)。

第一紙	紙長	五〇・二cm	天地	一八・一cm
第二紙	紙長	五〇・八cm	天地	一八・一cm
第三紙	紙長	五一・八cm	天地	一八・一cm
第四紙	紙長	五一・九cm	天地	一八・一cm
第五紙	紙長	五一・七cm	天地	一八・一cm
第六紙	紙長	五一・四cm	天地	一八・一cm
第七紙	紙長	五一・八cm	天地	一八・一cm
第八紙	紙長	五一・二cm	天地	一八・一cm

各紙裏の継ぎ目部分には、両紙にまたがるように印が押してあり、その印が第二紙と第三紙、第三紙と第四紙の継ぎ目でずれている。すなわち、

第二紙と第三紙の継ぎ目

第二紙 印高 下から一・九cm

第三紙 印高 下から三・二cm

第三紙と第四紙の継ぎ目

第三紙 印高 下から三・三cm

第四紙 印高 下から一・九 cm

である。表装以後のある時点で第三紙が剥落し、補修の際には、落葉百韻懷紙の複製をもう一組以上同時に用意しており、同時進行で製作していた際に別製本用の第三紙がまぎれこんでしまったものであろうか。更に、内容をも念頭に入れば、第三紙と第四紙は順序が逆に貼り込まれており、百韻の句は第一、二、四、三、五、六、七、八紙の順に並べるのが正しい。

懷紙は表紙、見返しと比較してかなり新しい。懷紙を継いで本文部分を作成する際、表紙は既に存した古代のものを用いたのであろう。懷紙の裏の汚れ具合に相違があり、第一紙が特に汚れ、他はさほどでもないことから、第一紙の裏を表面に重ね置かれていた時期があったものか。

書写された内容は、汚れもなく、連歌懷紙の形式としても整っており、美麗に写されている。が、第一紙、端作は「十月廿五日」のみであり、年次がない。第一紙は他の紙よりもわずかに短い。これ以上の記載はなく、書写の段階で既に欠けた状態の親本を写したものと思われる。第六紙に一句分の空白があるのも、同様に親本の段階の欠落である。第三、四紙が錯簡であるのは前述の通り。第八紙、句上に付随した注記は、句上と同筆か。句上の後ろに一行、小字にて書き込みがあるが、真ん中よりやや下に「や」が見える以外は読み取れない。本文とは筆跡が違い、すり消した跡が見られるものである。

箱は桐製で、形状はかぶせ蓋、縦二十一・七センチ、横六・六センチ。箱高五・八センチ。箱表中央上部に、打ち付け書にて「一條大閤御発句之懷紙」下部右よりに「日嘉師寄進」下部左よりに、本能寺の所蔵を示すラベルが貼られ、さらに下部に「住」の文字が書かれている。ラベルに隠れて見えないが、「本能寺常住」と書かれていたのであろう。所蔵ラベルは、卷子本の表紙同様、昭和十五年八月三十日付の「大本山本能寺什寶」と書かれたものと、日時不明の新ラベル「本能寺史料」が貼られている。